

## 麦類ほ場内のヒメトビウンカの生息密度調査結果

令和6年5月24日  
埼玉県病害虫防除所

病害虫防除所では、イネ縞葉枯病の発生量を予測するため、毎年5月に麦類ほ場内のヒメトビウンカの生息密度を調査しています。

今年度の調査の結果、麦類ほ場におけるヒメトビウンカの生息密度は33.0頭/m<sup>2</sup>で、過去10年で最も高く、平年(10.9頭/m<sup>2</sup>)の約3倍の生息密度となりました。15調査地点中約7割の10調査地点で平年を超える生息密度であることが確認されました。

本年はヒメトビウンカ越冬幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は2.4%と過去10年で最も低いですが、逆に生息密度は最も高いので、コシヒカリ、キヌヒカリ等の縞葉枯病感受性品種を作付けている場合はヒメトビウンカの防除を徹底しましょう！

### 1 イネ縞葉枯病について

#### (1) 病徴

生育初期に感染すると、新葉が黄白色に退色し、こより状に巻いたまま弓状に徒長する。このような株は「ゆうれい」症状とも呼ばれ、分けつが少なく、枯死する。幼穂形成期以降の感染では出穂しないか、出穂しても出すくみ症状となり、これらの症状によって減収する。



縞状病斑とゆうれい症状



出すくみ穂

#### (2) 病原の特徴及び伝染

ウイルス病でヒメトビウンカが媒介する。ウイルスはヒメトビウンカの体内でも増殖し、卵を通じて次世代に伝染する。麦類や畦畔雑草地で増殖したヒメトビウンカ第1世代保毒虫が、水田に移動してイネに感染させ発病する。感染・発病しやすい時期はイネの生育初期～幼穂形成期までで、その後は感染しにくくなる。

なお、本県育成の奨励品種である「彩のきずな」「彩のかがやき」は、本病に抵抗性を持っている。



ヒメトビウンカ3齢幼虫(体長約1mm)

## 2 調査方法

麦類の乳熟期(令和6年5月8日～14日)に、県内15地点の麦類ほ場において、1地点3か所で1m幅(0.25～0.75㎡)の麦穂を10回叩いて落ちて来るヒメトビウンカを採取し、1㎡当たりの生息密度を算出した。

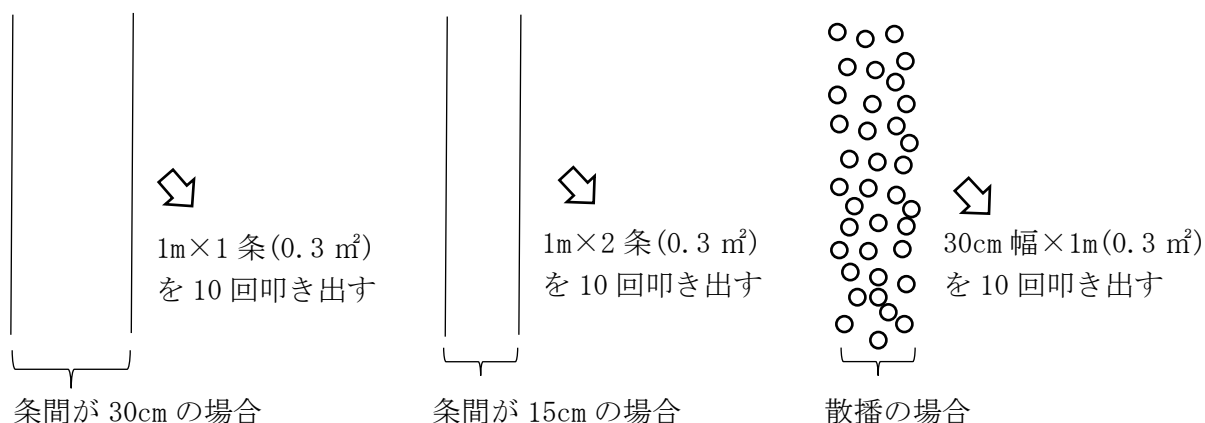


図1 麦類ほ場内ヒメトビウンカ叩き出し調査方法

## 3 調査結果の概要

今年度の調査の結果、麦類ほ場におけるヒメトビウンカの生息密度は33.0頭/㎡で、過去10年で最も高く、次に高かった昨年(21.8頭/㎡)の約1.5倍、平年(10.9頭/㎡)の約3倍の生息密度となった。また、調査地点によるばらつきはあるが、15調査地点中約7割の10調査地点で平年を超える生息密度となっている(表1)。

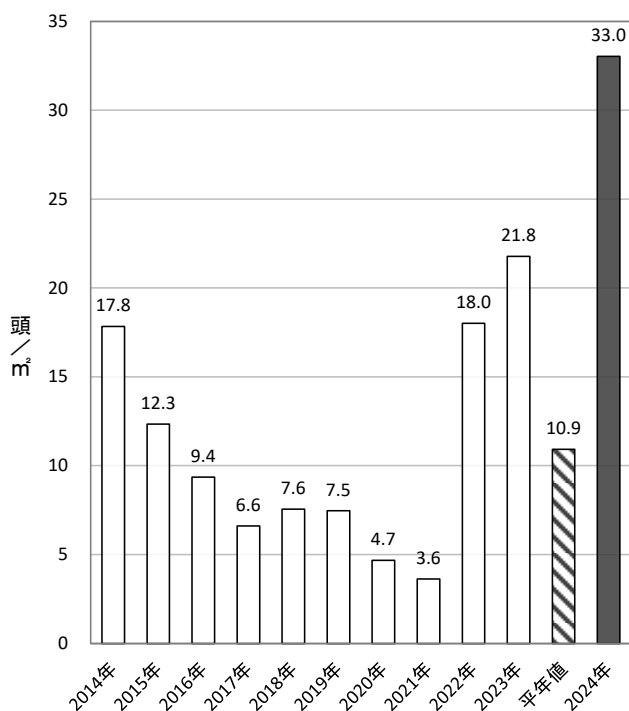


図2 麦類ほ場内ヒメトビウンカ生息密度調査結果の推移(県平均)

表1 令和5年度麦類ほ場内ヒメトビウンカ生息密度調査結果 (単位:頭/㎡)

調査場所	麦種	令和5年度		計
		成虫	幼虫	
川越市古谷上	小麦	0.0	6.7	6.7
坂戸市片柳	小麦	0.0	9.3	9.3
熊谷市樋春	小麦	0.0	36.7	36.7
熊谷市中曾根	小麦	0.0	63.3	63.3
川島町戸守	小麦	0.0	102.2	102.2
川島町東部	小麦	0.0	38.9	38.9
鴻巣市屈巢	小麦	0.0	82.7	82.7
行田市上池守	小麦	0.0	6.7	6.7
行田市前谷	小麦	0.0	31.1	31.1
加須市大越	小麦	0.0	57.8	57.8
熊谷市飯塚	小麦	0.0	5.6	5.6
上里町長浜	小麦	0.0	0.0	0.0
本庄市児玉町	小麦	0.0	21.3	21.3
白岡市太田新井	小麦	0.0	21.1	21.1
蓮田市駒崎	小麦	0.0	12.2	12.2
平均(15地点)		0.0	33.0	33.0
昨年(2023年)		0.2	21.6	21.8
平年(過去10年平均)		2.2	8.7	10.9

## 4 今後の防除対策

本年のヒメトビウンカ越冬幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は2.4%と過去10年で最も低いですが、麦類ほ場内の生息密度は最も高い。このため、コシヒカリ、キヌヒカリ等の縞葉枯病感受性品種において、箱施薬せずに移植した場合は本田防除を、現在育苗中の場合は箱施薬による防除を実施する。